

(研 究)

マレー博士のセルウィン・コレッジ時代に関する一研究

源 昌 久

(淑徳大学総合福祉学部)

I はじめに

筆者は、本誌『経済資料研究』第36号に「上田貞次郎のケンブリッジ滞在記録の一断章」(pp.39－43、2006年)を掲載した。その際、「マレーの伝記、“*John Owen Farquhar Murray, D.D./a memoir*” (C.H. Shepherd) が刊行されているようであるが、私は未見である(校正中に本書のコピーを入手)」と文中に記した。最終号に臨み、セルウィン・コレッジ Selwyn College のマスターであったマレー博士 John Owen Farquhar Murray (1853－1944) (マスター在任期間：1909年－1928年)を回想し、伝記事項を掲載している前述書(Web上では、日本の大学図書館、国会図書館には本書は所蔵されていない)を中心にセルウィン・コレッジ時代の業績等の事跡について紹介してみよう。

本論に入る前に、マレー博士の肖像画について一言述べておこう。筆者は、2005年7月から9月、ケンブリッジに滞在していた期間、セルウィン・コレッジのホール Hall¹⁾の壁面に飾られている歴代のマスターの肖像画中、マレー博士を画いたものがいずれかを判断するのに迷った。コレッジの事務方に問い合わせをし、ある絵像(氏名を示すプレートは付されていない)を指示された。筆者はその画を撮影し、帰国した。しかし、拙稿「上田貞次郎の第二回英国留学体験の成

1) Stubbings(1955:60)によると、(ホールとは)「伝統的なコレッジの平面図中で基本的な大きな空間であり、ダイニング・ルームである。食事のためのテーブルを備えているが、ホールは過去幾世紀にわたり学究的営為(講義)の場でもあった。」、「ホールそれ自身がホールの中での dinner を意味することがある」と記している。

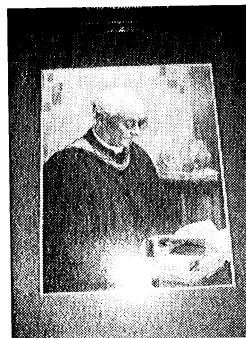
果に関する一考察」(『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』40、2006年3月、pp.171－186)中の注6(p.152)において記したようにマレー博士が撮影されている写真を見出し、先のポートレートに画かれている人物はマレー博士ではないことが判明した。

2006年8月3日に再び、マレー博士の画像を調査するためにセルウィン・コレッジのホールを訪れ、書籍に掲載されていた写真から肖像を見出し、さらにフレーム下方に取り付けられたプレートに刻まれている氏名・マスター在任期間により博士の影像(油絵)²⁾(写真1)を確認した。

その直後、現マスターであるパウリング教授 Richard Bowring (マスター在任期間: 2000－) にお会いするため、マスターズ・ロッジ(ホールの側)を訪^{そば}訪問した。パウリング先生は昨日(8月2日)、マスターズ・ロッジの倉庫でマレー博士の肖像画の下絵(Sketch)を偶然、発見したとの事である。筆者は額縁に納められた白黒の下絵(写真2)に見入った。なお、額の裏面下方には「Boots Picture Framing Department...」のラベルが貼りつけられていた。写真からも判るように絵の構図は一致している(サイズはホールのものの方が大きい)。この出会いは何かが働いて結びつけたのであろうか。筆者は奇縁を感じざるを得なかった。



(写真1)
マレー博士の肖像画
(於ホール)
(2006年8月3日筆者撮影)



(写真2)
肖像画の下絵
(於マスターズ・ロッジ)
Boots(社)作製の額縁に納められている。
(2006年8月3日筆者撮影)

2) Selwyn College (University of Cambridge) (1973) によると、本肖像画は1928年、Kenneth Greenによって画かれた。(PDF版 <http://www.sel.cam.ac.uk/college/history1973/> [2008/6/30])

Ⅱ マレーの略伝

John Owen Farquhar Murray, D.D./A Memoir (以下、*A Memoir* と略す)の内容はつぎの通りである。J.O.F. マレー [の略伝] (pp.1-2)、エマニュエル・コレッジ Emmanuel College, 1884-1903 (pp.3-5)、セント・アウグスティンズ・コレッジ St. Augustine's College, 1903-1909 (pp.6-8)、セルウィン・コレッジ Selwyn College, 1909-1928 (pp.9-12)、The Reader Movement (pp.13-15)、Training Course (pp.16-19)、著作 (pp.20-24)、結び (p.25)、Syllabus of Lectures on Christ the Redeemer (1938) (pp.27-50) の順に構成されている。この章では、*A Memoir* の内の J.O.F. マレー [の略伝] (pp.1-2) に基づいて、彼の略伝を中心に伝記的事項を紹介してみたい (可能な範囲で事項のクロス・チェックを行った)。

マレーは、1858年5月6日、ハムステッド (ロンドンの一部)³⁾ において軍医総監 John Murray の子息として誕生した。マレーは、母親と姉 (妹) と共にインドへ向かった。父親は、既にインド陸軍軍医として現地へ赴いていた。マレーはよく当時の思い出として、運動能力にたけ、4歳時には泳ぎが達者でダイブをしたと語っていた。

1866年頃、マレーは、英国 (England) へ帰国し、ランカシャー Lancashire のプレストン Preston (ランカシャー西部の都市で州都) でおばの世話になった。Elstree School (1848年創立。Preparatory School (私立学校) 男子校) および Roxall[Rossall] School⁴⁾ (1844年創立。当時、男子校) で教育を受けた。1871年、両親が帰国した。校長が H.M. Bultler の時代であったハロー Hallow 校 (Public School, 1572年創立, 男子校) へ入学し、Mr. Rendall's House に寄宿した。1875年クラス委員となり、1877年 Botfield Scholar を授与された。不幸にも、[本書の刊行の] 90年前にはこのような運動に関する名誉は、学校の記録簿に記載されるほどの価値がないと考えられて

3) Venn (1951:503) によると、John Murray の住所は「17, Westbourne Square London」と記している。

4) Public School への進学校である。[Rossall School (1923?:98)] によると、彼の入学は 1867 年、卒業は 1869 年卒業である。

いた。しかし、スポーツに対するマレーの熱意は相当なものであり、学校競技においてマレーは彼の役割を十二分に果たしていたとおもわれる。彼は、Cambridge Greek Testament 叢書の自著 *Ephesians* ⁵⁾ 中のコメントで Butler 校長に深い尊敬の念を表明している。Butler 校長は、第 6 学年の時、St.Paul への研究をはじめマレーに教示し、自分の思考へ特別な配慮してくださった人であると。

1877 年、ハロー校を卒業し、ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジ Trinity College へ入学した⁶⁾。1879 年、特待生 (Scholar) となる^{*7)}。1881 年、卒業 (文学士 (B.A.))。この際、神学のトライポス⁸⁾ で 1st Class。古典学トライポスで 2nd Class であった。1883 年、トルーロ Truro (イングランド南西部の都市) の Deacon (執事) 兼 Priest (司祭) に任命される (叙聖)。1884 年、文学修士 (M.A.)。

1884 年、ケンブリッジ大学エマニュエル・コレッジ Emmanuel College に移り、1886 年、フェロー Fellow に就任する。1884—1903 年、Dean⁹⁾ に就く。1889 年から Dean と同様にチューター Tutor を務める。1903 年、神学士 (B.D.)。1904 年、神学博士 (D.D.)。1903—1908 年、キャンタベリー Canterbury (英国国教会の総本山の地) の六伝道者 A Six Preacher。1903—1908 年、キャンタベリーのセント・アウグスティンズ・コレッジ (1848 年創立) の Warden。1903—1909 年、キャンタベリーの名誉参事会員 Hon. Canon。1909—1928 年、セルウィ

5) 本書の書誌的事項はつぎの通りである。

Murry, J.O.F. (ed.), *The Epistle of Paul the Apostle to the Ephesians*, Cambridge: Cambridge University Press, 1914. 103, 150p. (Cambridge Greek Testament for Schools and Colleges) なお、立教大学所蔵本は (故) 村尾昇一主教 (1889-1965) による寄贈本である。Butler 校長と St.Paul との挿話は、本書 (pref.vi) に因る。

6) Venn (1951:503) によると、マレーがトリニティ・コレッジのメンバーとして入学許可・登録されたのは 1877 年のミケルマス・ターム (10 月—12 月) からである。

7) *記号を付した事項は、Venn(1951:503) の記事による。

8) トライポスとは、学部卒の終わり (3 年目) に受験する University examination である。合格すると文学士 (B.A.) の称号を与えられる。成績優秀な学生には Honours degree が授与される。

9) Dean は、ケンブリッジのコレッジ特有の用語で「司祭」を意味していない。Stubblings(1955:33) によると、(Dean とは) 「(コレッジ内で) 聖職位を示し、フェロー Fellow であり、特に、コレッジのチャペルの典礼用聖歌において…」[「ただし、コレッジによっても意味が異なる場合もある」と記している。

ン・コレッジのマスター。1928－1944年、セルウィン・コレッジのフェロー*。1918－1944年、イリー Ely の名誉参事会員*。

1880年3月13日（トリニティ・コレッジ時代）、オックスフォード大学対ケンブリッジ大学のサッカー対校試合にマレーは選手（FW）として出場し、3－1で勝った¹⁰⁾。

私生活について A *Memoir* はつぎのように記している。1902年、マレーは、Ralph B. Somerset 師（以前、トリニティ・コレッジのフェロー。ある時期、エマニュエル・コレッジの Dean であった）の子女 Frances Margaret と結婚した。当時、マレーは44歳、彼女は32歳であった。彼女が、マレーの聖書研究会に参加した際、彼らは初めて出会った。お互いが完璧にお似合いであった。1904年にジャック Jack、1907年にラヴデイ Loveday の一男一女を授かった。マレーは、常に気持ちを若く保ち、子供達の趣味に関心をおおいに払った。ラヴデイは、父の書斎に入り、彼のお好みの作家 ジョージ・マクドナルド George Macdonald (1824－1905) の『お姫さまとカーディ少年』 *The Princess and Curdie* (1877) あるいは『ファンタステス：フェアリー・ロマンス』 *Phantastes* (1858) のお話を彼の膝の上でリラックスして、うっとりとして聞いていたと思いを述べた。後年、彼女は、父親がゴルフ・コースでプレイをする時、キャディを務めた。彼は、The Sheringham Golf Club¹¹⁾ の会員であり、このクラブはマレーの父君が設立メンバーの一人であった。家庭の雰囲気は、きわめて満足な気持ちで一杯であり、平穏な様子であった。子供達の元気をそぐようなことはなかった。家族が父親の周りで騒いでいる時、父親が静かに椅子に腰掛けて説法を落ち着いて執筆する姿は非常に素晴らしい光景であったとラヴデイは思い起こしていた。マレーは、甲高で即妙な笑いをした。その笑いは批判を取り除き、他の人々に広まっていくもの

10) Rysden(1900:144) には、全出場選手名および試合会場として「The Oval」が記載されている。

11) 本ゴルフ・クラブは、イースト・アングリア地方のノーフォークに位置し、1891年に9ホールで開場し、1898年に18ホールに拡張された。現在、English Ladies' Championships の開催会場となっている。http://www.sheringhamgolfclub.co.uk/home.htm [2008/6/30]

であった。

Ⅲ セルウィン・コレッジの時代（1909-1928年）

本章では、*A Memoir* に基づいて、セルウィン・コレッジ時代を中心にマレー博士について述べてみよう。本書のはじまりの部分では、セルウィン・コレッジの成立史が記されている。筆者は既に本誌36号の拙文中で記載してあることとほぼ同様なので成立史の記述を省略する。

A Memoir は、マレー博士がマスターとして選出され、その在任期間（19年間、William Owen Chadwick（1955—1983年）につき歴代二番目の長さ）中、コレッジにとり三件の有意義かつ重要な出来事を列挙し、明示している。

第一は、1913年、コレッジの最初の学則（Statutes）を制定したことである。

第二は、1914年から第一次世界大戦の開戦であった（—1918年）。この間、コレッジの財政的状況は苦難な状態であった（IVでも言及）。寄付は非常に少額になった。臨時の陸軍病院に附属している看護婦用の部屋の使用料を政府が支払わなかった。学部学生数は極めて少なかった—わずか8名—。マレー博士は出来るだけのことを実行した。チューターや講師は給与なしで済ませてもらった。彼らに助けられ、コレッジは生き延びることが出来た。

第三は、「1926年の the University Statutes（大学学則）」中でセルウィン・コレッジとして認定されたのである。つまり、この認定により Public Hostel（Selwyn Hostel）からケンブリッジ大学の Approved Foundation の地位を獲得した。このことにより、1885年以来、セルウィンは Public Hostel としての不利な場に位置していたが、この時以降かなり改善された状況におかれた。

マレー博士は、在任中、いつでも学部学生の気持ちを理解しようと心がけていた。マレー夫人をホステスとして、マスターズ・ロッジで土曜日の晩にパーティを開いた。当時の家事担当者は、セルウィン・コレッジでの大変、楽しく幸福な日々を語ってくれる。「当時、ロッジのドアはいつも開かれ、生活は活気に満ちていた。マレー博士は、

常に同じで、のんびりとし、辛抱強く、物静かに話し、ユーモアに溢れていた」と。

マスター職在任期間の19年間は、コレッジに奉仕精神を捧げ、自覚し、心を専念したと要約されるであろう。精力的な仲間の一団の支持を得て、財政的情勢を改善し、コレッジや以前からのメンバーに強力な団体精神を彼は養った。彼のやり方により、セルウィン・コレッジは、旧時よりケンブリッジ大学内で一層、高い地位に着いたことは間違いない。知と武（運動）共に成就した¹²⁾。

1928年、制度上、彼はマスター職の地位を退く年齢に到達した。退任後、近くの家屋（15, Selwyn Gardens, Cambridge¹³⁾ か。この場所ならば正門から徒歩5分以内）へ引っ越した。家の玄関ドアの前には、「音楽のお好きな方は、どうぞお入り下さい」との掲示があったことを思い起こさせた。マレー夫人は、だれにでも何時間もピアノを演奏した。彼女は、数多くの委員会の一員であり、特に関心があったのは the East and West Society であり、親睦の夕べに全ての人種の海外留学生をたびたび招いた。マレー夫人は1927年に亡くなった。ラヴデイは、音楽を学び、A.R.C.M. (Associate of the Royal College of Music) を引き受け、短期間、音楽を教授した。彼女は F. A. Richards 博士と結婚し、四人の子息を得た。マレー博士の子息 J. Somerset Murry は、ある会社の顧問技術者となった。

長い間、マレー博士はコレッジとの結びつきを保ち、常にチャペルへの礼拝をし、彼が関心をもった多くの分野へ熱心に参加した。

IV おわりに

本稿を作成途中で、マレー博士は、外部社会にコレッジに関する情報（状況）をいかに発信し、アピールしていたのであろうかと思い始めた。英国を代表する新聞『タイムズ』The Times のデューダ・ベース Digital Archive 1785－1985 を利用する機会を得た。

12) 文武の優秀な成績結果は、Brock and Cooper(1944:163-164)に掲載されている。なお、当時、セルウィンに在籍していた日本人学生の特ニス・プレイヤーが Good(2007:89)に記載されている。彼の氏名は、「Sawada Kiyoshi」(SE1925)。彼は、1920年代のチームで活躍し、1926年—1927年のチームの副主将であった。

13) 本事項は Venn(1951:503) による。

「J.O.F. Murray」[1909－1985] (期間) の語で検索を試みた。結果は 14 件がヒットし、セルウィン・コレッジに直接、関連する記事を 2 件見出した。

(1) 「Selwyn College」(Letters to the Editor) Aug. 31, 1917. (230 words)

(2) 「Selwyn War Memorial」(Letters to the Editor) Feb. 02, 1921. (99word)

(1) において、第一次世界大戦の影響でコレッジの財政状況が極めて悪化した。開戦以降、古くから存立しているコレッジ (older colleges) 以上に学部学生の入学者数が減少し、経営は深刻である。コレッジの会計は年に £ 1000 以上の赤字であると困窮を訴えている。そこで、コレッジへの寄付をお願いしたいとの趣旨の記事である。

(2) は既述のように本記事は 99 ワードからなる短報である。第一次世界大戦に出征し、戦死したセルウィンの旧メンバー (卒業生) の名簿を作成したいとの呼びかけである。

この 2 点をみると、第一次世界大戦の影響がセルウィンの運営に多大な負担をおわせ (Ⅲにおいても既述)、旧メンバー (卒業生) の戦死者が相当、存在したことが判明する (Good (2007:88) によると卒業生 70 名とコレッジ職員 2 名が戦死)。筆者は、マレー博士がマスターとしてこれらのことに気遣う様子を読み取る。

A Memoir の著者 Shepherd (1963:pref.) は、本書を執筆する動機について、「年月は過ぎ去り、マレー博士を知っている階層の人々は急速に減少している。そこで、この A Memoir は、彼が長きにもわたり、活動的な生活を送り成しえた業績の側面を忘れないために記されている」と述べている。

筆者は、『経済資料研究』の最終号 (第 38 号) に執筆するに当たり、まさに Shepherd と同じような感情を有した。「経済資料協議会」および『経済資料研究』が末永く社会科学ドキュメンテーション界に残り、忘却されないことを願って、拙稿を記した。社会事情等により、時勢に対応できず 2008 年 10 月をもって「経済資料協議会」は解散となるが、本会の活動は、わが国の図書館・情報界において実践的な活動に携わってきたと確信している。

本稿を作成するにあたり、ケンブリッジ大学中央図書館日本部長
小山 騰氏は、資料の複写、レファレンスに協力して下さり、厚くお
礼申し上げます。

<文献>

Brook, W. R. and P. H. M. Cooper, *Selwyn College: A History*, Durham: Pentland Press, 1994.

Good, M., *Selwyn Celebrated 1882-2007*, Cambridge: Selwyn College, 2007.

[Rossall School], *The Rossall School Register 1844-1923*, Oxford: Holywell Press, [1923?].

Rysden, O., *The Book of Blues: Being a Record of all Matches between the Universities of Oxford and Cambridge in every Department of Sport*, London: F. E. Robinson, 1900.

Selwyn College (University of Cambridge) , *Selwyn College, 1882-1973: A Short History*, [Cambridge] Selwyn College, 1973.

Shepherd, C. F., *John Owen Farquhar Murray, D.D.: A Memoir*, Westminster: Central Readers' Board, 1963.

Stubblings, F., *Bedders, Bulldogs and Bedells: A Cambridge Glossary*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995.

Venn, J. A., *Alumni Cantabrigienses: A Biographical List of All Known Students, Graduates and Holders of Office at the University of Cambridge, from the Earliest Times to 1900*, Cambridge: Cambridge University Press, 1951.